

ヒューム思想における主体性の問題について

The Issue of Subjectivity in Hume's Philosophy

中 村 隆 文

NAKAMURA Takafumi

要旨 ヒュームは因果関係を批判し、さらに人格の同一性も虚構的なものとして批判したことから、その思想は、デカルト以来疑われることのなかった「明晰な私」さえも否定する懐疑主義としてみなされてきた。事実、彼はその著作『人間本性論』において、実体を主張する二元論が根拠のない通俗的な説であると明言し、その論駁を主な目的としている。だが、私は、そうした動機、およびその議論の方法が懐疑主義的なものであるとも、あるいは、結論としてヒュームが懐疑主義者であるとも解釈されないものであると考えている。しかし、だからといって、ヒューム思想の本質が実際には彼自身が否定した二元論に拠っているということでもない。

経験論は通常、知覚の中断にも関わらず、時間的経過における主体の在り方は不変的で同一的であるような主体實在論的立場にある。ヒュームは人格の同一性を批判しているものの、ヒューム思想全般の理論的背景として、そのような主体實在論的な経験主義、あるいは彼が否定するところの、主体の實在性を認めるような二元論を採っているとする解釈も少なくない。この論文における目論見としては、人格の同一性分析におけるヒュームの反主体實在論的立場が、因果分析を可能にしているヒュームの経験論と理論的に矛盾しないことを示し、ヒューム思想というものが、二元論あるいは主体實在論とは異なる形で主体の拡がりを示していることを明らかにしてゆくことにある。ヒュームの『人間本性論』における因果分析、人格の同一性分析を通しつつこれらのことを検証し、二元論的主体をどのような意味において否定しているのか、そして、主体というものがどのような位置付けをされているのかを考察してゆきたい。

「1」 人格主体の非同一性

ヒュームがその認識論を展開するにあたり、必ず重視していることは、各知覚間に介在するとされる普遍的関係というものを払拭し、それぞれの知覚を個別的かつ独立的な存在とみなすことである。それゆえ、因果分析においては、「原因」である（ような）知覚Aと、「結果」である（ような）知覚Bとの間の普遍的な因果関係の存在を否定し、両知覚がそれぞれ独立的に存在するという立場に立っている。また、連続的存在（物体＝実在物）に関する分析においては、ある時点T1で見た物体の知覚（をAとする）と、一旦目を閉じ、再び見開いたときの物体の知覚は（Bとなり）別物であるとし、それぞれの知覚が異なった知覚、すなわち異なった

物体であることを主張している。

これらのことは、各知覚はそれぞれ異なった存在者を示している、という知覚個別化の原理に基づいている。こうした立場から、人格の同一性分析においても、ある時点T1における人格A（の知覚）と、別の時点T2における人格B（の知覚）もまた、それぞれが別人を示すものとなり、両者の間に人格の同一性という関係がある主張にヒュームは反対する。そしてヒュームはさらにその批判の先を他者人格のみならず「自己」にも向け、主体自身が想起を通じ、過去の「私」と現在の「私」を同一視することの正当性にさえも疑いの目を向ける。

ヒュームがそのように語る主たる論拠として、知覚の中断ということが挙げられる。ある知覚Aと別の知覚Bの個別性は、両者が完全に別個に現れている事実によって示されているのであり、そこには、いかなる対象においても知覚されない場合には存在し続けているとは言えないような、パークリーの主張を徹底させたようなヒュームの知覚論が強く働いている。このような知覚の中断は、連続存在の批判と同様の形をもって、主体の連続性および同一性批判の根拠として示されている。そしてそれは、主体の実在性を否定するような、反主体実在論者としてのヒュームの立場の顕れでもある。

私はいかなるときにも、知覚なしに自己を捉えることが決してできず、また、知覚以外のものを観察することも決してできない。私のもつ諸知覚が、深い眠りなどによってしばらくでも取り除かれるとき、その間は、私は自己を知覚しておらず、私は存在していないと言っても間違いではない（T252）⁽¹⁾

われわれは中断を取り除くために、われわれの感覚能力の諸知覚の連続存在を虚構するのであるし、また、変化を隠すために、魂や自我や実体の考えに陥るのである（T254）

つまり、眠りなどによって連続的な自己意識（自己知覚）が中断される場合、眠る前の「私」と、眠った後の「私」とを無批判的に同一視されるべきものではない、とヒュームは理論上において語っている。それゆえ、過去における「私」と現在の「私」とを同一たらしめるような普遍的な自己もしくは実体というものは存在しないという結論が導出される。もちろん、主体が有する記憶というものは「私の記憶」としての観念でもあるため、その観念は過去の時点における自己存在を含蓄している。しかしそれは、現在における自己と同一の存在を意味しているわけではない。それは、真なる事実を表さないキメラ的な複合観念もしくは複合記憶かもしれないし、なにより、ヒュームの知覚理論においては、記憶が表す経験主体とは、想起主体と同一人格である必然性はないということが強調されているのである。自己が有する記憶とは、現実的には必ずしも自己の経験に基づいている必要もないし、理論的にもそれを自己の経験と呼ぶ必然性はない。よって、「精神は、様々な知覚が次々とそのうちに現われる、一種の演劇である」（T253）というヒュームの有名な主張は、一人称的な自己という観念は、理論的に非人称的な各知覚によって構築されたものである、ということの意味しているといえよう。

しかし、当然これは通常の自己認識そのものとは異なるものであろう。過去における自己（と思われる存在者）と現在の自己とが非連続的であるとしても、過去の出来事、すなわち過去の知覚というものが、非人称的でありながら、「自己」の記憶として現れることについてどのように解釈し、説明すればよいのであろうか。ヒューム自身、このことについて苦悩し、付録で

以下のように述べている。

私は、私の説明が大きな欠陥をもち、先の推論（人格の同一性が虚構であるという推論）の見せかけの明証性以外に私にそれを受け入れさせ得たものはないということを感じる。諸知覚が、たがいに別個な存在者であるならば、それらは、たがいに結合されることによってのみ、一つの全体を形成する。しかし、たがいに異なる別個な存在者の間には、人間知性によっては、いかなる結合も、けっして見出すことはできない。われわれは、ただ、或る結合を、すなわち、一つの対象から別の対象へ進むように思惟が決定されていることを感じるだけである（反省的印象）。……しかしながら、われわれの継起する諸知覚をわれわれの思惟または意識において結びつけている諸原理（記憶というものが主体意識に必然的に結びつけられる原理）を説明する段になると、私の希望はすべて消え失せてしまうのである。私は、この点について私を満足させてくれるような理論を発見できない。

要するに、二つの原理があつて、私はそれらをたがいに無矛盾にすることができず、またいずれか一方を廃棄することも私の力を超えるのである。すなわち、「われわれのすべての別個な知覚は、たがいに別個な存在者である」（知覚の独立存在性）という原理と、「精神はたがいに異なる存在者の間に、いかなる真の結合も知覚しない」（知覚＝存在、非知覚＝無存在）という原理とである。われわれの諸知覚が何か単純で個体的なものに内属しているか、それとも、精神が諸知覚の間に何らかの真の結合を知覚するのであれば、この場合何の困難もなかったであろう（しかし、2つの原理のどちらもともが正しく、個別的知覚を内属させるような実体も、また個別的知覚を結合させるような関係も、どちらも見当たらないにも関わらず、諸知覚が「私」に統合されているという説明不可能な事実がある）。(T 635-636) () は訳者補足

理論上は、過去における経験主体と想起主体である「私」とを同一視することは正当性を欠いているけれども、しかしそれでも、「私」と呼ぶ以外にありえない現実的的日常が存在する。そもそも経験論における「記憶」とは、実際に体験した印象が観念へと形を変えた知覚であり、それは体験者であり、かつ想起者である「私の記憶」である。経験論が日常から出発している以上、過去における主体というものは、記憶内容の真偽の程はともかく、定義上、「私」と呼ばざるを得ない。そして、因果分析におけるヒュームの立場も、過去における経験主体を「私」とするような前提のもとに議論が展開されている。ヒュームのこの苦悩は、「記憶」という語の使用法というものが、日常においても、またヒュームの知覚論においても主体実在論的に規定されているということを示している。ペアズはこうしたヒュームの苦悩に着目し、ヒュームは理論と実践の狭間で揺れ、結局彼は人格の同一性批判における主張を破棄し、テキストの紙面においては、彼が本来否定したはずの二元論的な見解を採ったと主張する。ヒュームは人格の同一性分析における意見を付録において取り下げたが、因果性分析におけるその意見は取り下げてはいないということ。そして、その内容においては、人格の同一性分析のなか、結局ヒュームは、各知覚のどれが他者的なもので、どれが自己的なものであるかということを決して問おうとはせず、それゆえ、批判の最初の時点において、すべての知覚が一人の「私」の経験した知覚であることを前提として議論をしている。ペアズは、これらをもって、ヒュームが結局は二元論者であったと解釈している。⁽²⁾

確かに、人格の同一性批判におけるヒュームの知覚理論は、経験論において前提とされるよ

うな、時間点を越えた主体の存在可能性を確かに危うくするものである。しかし、だからといって本当にヒュームが理論を棄て、二元論に近い形で主体実在論を採ったという解釈は、少なくともヒューム自身の意図の点から考慮すれば不整合なものである。ヒュームの知覚理論において意図されているのは、主体人格を成立させている原因としての主体実在論的な「実体」、もしくは宗教的な「靈魂」を否定することであり、そうした理論が日常的な経験と異なるとはいえ、そうした理論は破棄される必要はないし、また実際にはヒューム自身破棄してはいないと考えられる。付録におけるヒュームの苦悩は、理論か現実かの二者択一的な苦悩ではなく、自身の理論のより適切な表現方法というものを欲していた、文筆家としてのヒュームの苦悩と解されるべきであろう。そもそも、ヒュームの経験論において、主体の連続的な実在性が前提とされている必要はない。ゆえに、理論か実践かの二者択一にヒュームが迫られる必要はないし、そうした意味において、ヒュームの思想はそうした二分法の枠組みを越えるものである、というのが私の解釈である。

確かに一見すると、ヒュームの理論は主体実在論を前提としてるかのように見える。過去における印象Aの経験がなければ、現在における観念（記憶）Aが存在しないという経験論の前提は、過去における経験主体と、現在における思考主体とが同一人格であることを意味していることは少なくとも認めなければならない。だからこそ、ロックもバークリーも、思考する「私」自身に対し、ヒュームほど踏み込んだ批判はできなかったのであろう。では、なぜヒュームは主体概念に対し、そのように踏み込んだ批判が可能であったのか。この点が重要なポイントであろう。その理由として、ヒュームは、主体概念は基体として一次知覚（感覚知覚）の経験や想起としての思惟を可能にする実体ではなく、逆に、一次知覚には現れないものが現れるところの可能態として主体を捉えているからである。ヒュームにとっての主体とは、一次的印象や思惟を表象として可能にするような、単一的にそれ自体で存在可能であるような実体でなく、一次知覚に構成されつつ、それでいて一次知覚には現れない新しい「関係」が発見されるところの「状態」そのものである。非人称的な知覚によって受動的に構成されていることはもちろん、非人称的な知覚間の関係が成立している状態としての精神、それこそがヒュームにおける主体性の特徴であるし、それゆえ、不変的主体を中核とする主体実在論の批判が可能であったともいえよう。この特徴を如実に示しているのは、ヒュームによる反省的印象（impression of reflection）という語の使用である。

ヒュームの反省的印象という語は、そもそも、印象として直接経験されていない概念を我々が何故有するのか、という点から導き出されたものである。「因果関係」「実在」「必然性」など、直接経験される印象それ自体には含まれないこれらの概念を我々が所有しているという事実について、それらの原型となる印象がなければロック以降確立され続けた経験論自体の原理が危うくなってしまう。ヒュームはこのことについて自覚的であった。

すなわち、我々は印象から生じないようないかなる観念も持っていないので、我々は、もし必然性の観念を我々が実際に持っている主張するのであれば、この必然性の観念を生み出す何らかの印象を見つけ出さねばならない。（T155）

ここでヒュームは、そのような観念が存在するためには、そのような印象の存在が不可欠であると、反省的印象という二次的印象を発見した。ここにおいてヒュームは「心の決定」と

いうものに着目し、反省的印象は「心が決定されている」状態の知覚であるという位置付けを行う。

複数の事例に対する反省は、ただ同じ対象を反復するだけであり、それゆえ、新しい観念をけっして生み出すことはできない。しかし、さらに調べてみると、私は、反復がすべての点で同一であるのではなく、一つの新しい印象を生み出し、これによって、私が現在吟味している観念を生み出すことを見いだすのである。というのは、私は頻繁な反復の後では、対象の一つが現れれば、精神が習慣によって、その対象にいつも伴っていた対象を考察するように、またそれを、その最初の対象に対する関係ゆえに、より強い光のもとで考察するよう決定されていることを見いだすからである。してみると、私に必然性の観念を与えるのは、この印象すなわち決定(されている)という印象である。(T155-156) ()は訳者補足

感覚的観念およびそれに先行する印象をいくら振り返ってみても、必然性のような観念というものが生産されることはない。あらゆる事象は端的なものとして単なる像の反復であるため、感覚的印象という端的な表象には存在し得ない観念が生産されるためには、精神の観照によって反省的印象が生じていることを発見することが不可欠である。そしてそれは、決定されている自己を知覚するということでもある。ドゥルーズは、ヒュームのこうした反省的印象に関し、そこでは「因果性」「必然性」といった概念のみならず、その現出を可能にさせるところの主体性の観念が暗示されていると指摘する。

たしかに、必然性の観念は存在する。しかし根本的には[必然性の]反省的印象が論じられるべきであって、そうであるのは、必然的關係とは或る精神である、すなわち、(或るいくつかの事情のもとで)或るひとつの対象の観念によって別の対象の観念を形成するよう決定され、変様されたものとしての精神である、という意味においてのことである。必然性の[反省的]印象は、[必然性の反省的]観念を、諸事物の一性質として再生産することはできないだろう。なぜなら、そうした印象は、精神の一つの性質づけだからである。反省的印象、すなわち[連合]諸原理の結果=効果、これらの本領は、精神を或る一つの主体として様々な仕方で性質づけることにある。したがって、諸変様[つまり性質づけ]のほうから明らかになるのは、そうした[反省的印象としての]主体性の観念である。この観念という語は、[感覚的観念とは]もはや同じ意味を持ちえない。諸変様の心理学は、構成された一個の主体の哲学になるであろう。⁽³⁾

注意しなければならないのは、主体存在が前提となってそのような反省的印象が生じているのではないということである。事象を超えた意味が成立しているのは、事象を超えた主体が前提として存在しているからではない。もしそうであるならば、事象を超えた意味が成立していない状況においても主体は知覚されない形で存在し続けることになる。ヒュームはこの種の非知覚主義について一貫して否定している。そうではなく、事象を超えた意味が成立している状態こそが主体精神そのものを意味し、そこにこそヒュームの思想が意味を持ちうるのである。

「因果関係」や「同一性」が虚構であり、まやかしかであるとヒュームが指摘するのは、それが感覚世界において、主体とは独立的に実在し続けるような関係として考えられがちだからである。端的な事実を超えた概念、それ自体の成立においてこそ主体というものが生じているので

あり、そこでの主体とおいうものは、己自身を超えた世界において受動的に構成されているのである。ヒュームにおいては、唯一的な主体が己を出発点としつつ能動的に思考してゆくのではなく、思考する主体そのものが己を超えた世界によって受動的に構成されている様が描かれている。反省的印象の例で言えば、反省的印象を現出させる思考という能動的とも見える運動は、裏を返せば、非人称的な知覚記号によって受動的に構成されていると同時にそれを超越している主体存在の現れなのである。

端的な諸事実、あるいはそれらが示す記号としての知覚を超越した「関係」は、能動的な主体によって構築されるのではなく、規定された主体において既に構築されているものである。すなわち、主体が存在し、それから「関係」を構築するような思考が展開されてゆくのではなく、すでに「関係」が構築されているよう決定された思考が存在し、そうして主体が初めて己自身を感じ、己が己を超えた、しかしまた同時に己に属するものとしての要素によって構成されていることを認識するのである、ドゥルーズは、ヒューム思想のこの側面について以下のよう述べている。

規定とは、ヒュームにおいては、規定するものではなく、規定されるものである。ヒュームが精神の行為、傾向という言い方をするとき、彼が言わんとしているのは、精神は能動的だということではなく、むしろ能動化され、主体へと生成しているということである。ヒューム哲学の首尾一貫した逆説は、自分を超出しながらもやはり受動的であるといった主体性を提示するところにある。主体性はひとつの結果＝効果として規定されており、それは一つの反省的印象なのである。精神は、諸原理によって変様されて、主体へと生成するのである。⁽⁴⁾

主体とは、精神の諸原理によって構成されるところの受動的主体であり、ヒュームが自己同一性批判において描写した「知覚の集合体」という表現も、この意味に則して理解されるべきである。因果分析において中心的役割を果たす反省的印象が、人格の同一性批判における主体概念と合致する以上、ヒュームの主体論というものが因果論から人格の同一性論を通して、ある程度の整合性を有していることは認めねばならない。

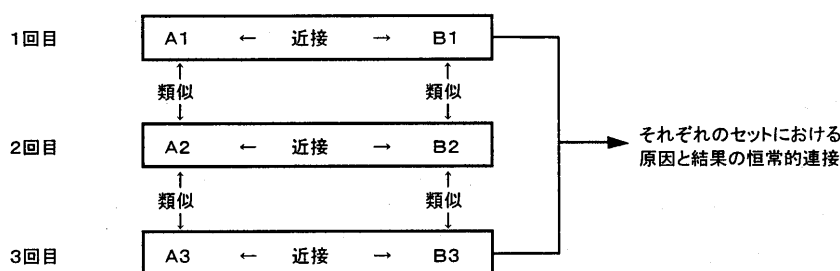
しかし、このような主体の受動的な在り方については、ヒュームの思想を経験論の流れから考察する以上、不自然さと疑問を感じるであろう。なぜなら、「経験したもの以外のもの(印象)を観念として所有することはない」という経験論の前提そのものが、過去における経験主体と現在における想起主体が同一であることに依拠しているように見えるからである。全くその源泉たる単純印象をもたないような擬似記憶の存在をヒュームが認めない以上、時間軸上の異なる時点において同一主体が存在する可能性は前提として認めなければならないであろう。この点について率直に言えば、ヒュームの思想は確かにそうした前提に若干基づいている様相を呈していることを認めざるを得ない。しかし逆に、観念の源泉たる単純印象を実際経験していないにも関わらず、そうした印象を実際に経験したかのごとく主体が感じる、といった事態がヒュームの理論において含まれるならば、ヒュームの思想はやはり主体実在論を超えた意味を有するものであり、因果分析と人格の同一性分析におけるヒュームの理論は整合的なものとして解釈されうるのである。このことについて、ヒュームの因果論を再度検討しつつ、ヒュームの知覚論における主体の位置を吟味してゆこう。

「2」因果分析における主体性

ここでは、因果分析での自然主義的な議論の内において、主体性というものがどのような形で示されうるのか、ということについて考えてゆきたい。ここでのポイントは、過去における知覚と現在における知覚、両知覚からの意味生成の場において、主体が實在論的に同一であることが必ずしも前提とされているかどうかということである。

因果関係という概念が生じるための要因として、ヒュームは「類似」「近接」「恒常的连接」というものを挙げた。「類似」というものは、原因および結果としての事象がそれぞれの事例において類似していること。そして「近接」というのは、それぞれの事例においては必ず原因となる事象の次にすぐさま結果となる事象が存在するということ。そして「恒常的连接」というのは、恒常的に原因と結果とが近接関係であるというような、各事象における原因と結果の近接関係の類似ということである。これを大雑把に図にすると以下のようなになるだろう。

<図 I>



以上の図が、因果分析における各事象（知覚）間の関係をまとめたものであるが、ここで注意が必要となる。因果関係の成立において、それぞれの要素が不可欠であるとヒュームは主張するわけであるが、各原因間および結果間の類似性、すなわちA種間の類似性とB種間の類似性というものが不可欠であるということは、少し考えれば非常に不明瞭かつ不必要であるように思われる。仮にA1が「蠟燭に火をつける」という行為であり、A2が「ダイナマイトに火をつける」という行為であれば、それらが類似という人もいれば、それらは全く異なる行為という人もいるであろう。「火をつける」という行為を重視するならば、そこにおいては「同種」の行為と言えよいはずであるし、これは結果についても同様である。1回目の原因（となる知覚A1）と2回目の原因（となる知覚A2）が互いに類似しているという認識は、必ずしも普遍的に成立するというわけではない。それに関わらず、そこにおいて「類似」という関係性をヒュームが持ち込む意図を汲み取ることこそ重要である。

ヒュームの因果批判の核心は、A1とB1、A2とB2、A3とB3、それぞれの間には因果関係というものは存在せず、それぞれの事象（知覚）は近接しているにすぎない、というものである。ここでは、「各知覚はそれぞれ個別的かつ独立的な存在者である」とする、ヒューム独自の個別化原理が機能しているため、「両者の間に必然的なつながりはない」ということになる。これを個別化原理の第一の意味としよう。

そしてさらに、事象（知覚）A1～A3、B1～B3の間の関係を「同一」ではなく「類似」

と呼ぶ理由として、「各知覚はそれぞれ個別的な存在者である」とする個別化原理がまたも機能しているわけであるが、ここにおいては「厳密な意味での反復（繰り返し）はない」ということが意味されている。これを個別化原理の第二の意味とする。先ほどの、A種間、B種間における「類似」を強調したヒュームの意図についてこの点から言えば、厳密な意味での原因および結果の繰り返しというものはヒューム思想において原理上ありえないため、ヒュームはあえて「類似」という呼び方をしたと考えられる。「同種の」とか「同じ」という言い方をしなかった背景には、各知覚を完全に個別的なものとして取り扱うヒュームの態度が表れているといつてよいであろう。この個別化原理の第二の意味において意図されている非反復性は、主体人格の同一性批判においても同様に、「同じ」自己の繰り返しなどないという形で展開されており、主体の同一性批判の理論的前提が、因果分析におけるヒュームの議論において既に適用されていると結論づけてよいであろう。

しかし、これだけでは、因果分析の議論においてヒュームが主体実在論的な主体同一性を適用していないことの証明にはならない。というのも、依然としてA1～A3、B1～B3までの知覚を経験した主体が同一であることを前提としているようにもみえるため、ヒュームの経験主義的な因果分析において、あらゆる種類の知覚が非反復的な仕方では反復的自己において現れるのではなく、非反復的な受動的主体において、非反復的な知覚表象が「反復」の概念を形成するということが明らかにされなければならない。そのためには、個別化原理における各知覚間の差異がどのように発見されるのか、というその思考段階をなぞりつつ、ヒュームの因果分析を再検討してゆこう。

例として、「チックタック」という音の例を考えてみよう。ある人は、これまで「チック」という音を聞いた場合、必ずその後「タック」という音を聞いていると想定する。ヒュームの因果分析においては、当然「チック」と「タック」の間に必然性はないと考えられるのであるが、そもそもこの「チック」と「タック」がそのような形で分離される順序について考えてみたい。

「チックタック」が初めて印象として現前する場合、そこにおいてははまだ「チックタック」の分割は行われぬ。ゆえに、「チック」から「タック」への観念連合がまだ生じていないということになる。「チックタック」が「チック」と「タック」という二つの要素に分割されるためには、「チックタック」の「チック」と「タック」が常に近接していないということが経験されなければならない。すなわち、前の図Iでいうところの「恒常的连接」という関係が意識されなければならない。というのも、分割可能な形で「チック」「タック」が近接しているということが理解されるためには、両要素が不変的に「結合」しているのでなく、恒常的に「连接」していることが経験され、そして過去においてその反証事例も経験されていなければならないからである。もちろん、前の図Iにおける1回目、2回目、3回目のそれぞれのセットは厳密な反復ではないし、なにより厳密に同じ反復での「チックタック」などは存在しない。しかし、こうしたことが理解されるためには、まず最初にそれぞれの「チックタック」が「同じである」という意識から出発し、それから反証事例を通じ「同じではない」という見解に到達するという道筋が必要である。そうした意味から、以下の各段階があると考えるであろう。

(1) 第一段階

「チック」「タック」が恒常的に连接されているような「チックタック」の複数回の経験と、

例えば「チックバック」のような、例外的ケースの経験が必要とされる。

（２）第二段階

第一段階の経験から、「チックタック」と「チックバック」との差異が明瞭なものとして認識され、そして、個別的知覚としての「チックタック」「チックバック」が観念化される。さらに複合観念の成立を説明するのと軌を同じくする形で、「チック」「タック」「バック」というように、各知覚が各要素に分類する。そこで「チック」→「タック」の関係が普遍的でないことが分かる（個別化原理第一の意味）。

（３）第三段階

第二段階で部分的要素とされた「チック」「タック」「バック」の差異により、また「チックタック」と「チックバック」の差異により、前者の「チック」と後者の「チック」とがもはや「同一」ではなく「類似」した差異的な「チック」であることが理解される。（見た目の上での）反復の過程において、それぞれの「チック」は類似に基づく共通項に括られるにもかかわらず、それぞれは本質的に異なる「チック」であることが理解される（個別化原理第二の意味）。

「チックタック」という印象は「同一」という意味では反復されないし（第二段階）、その要素である「チック」と「タック」もまた同様である（第三段階）。つまり、「チックタック」という観念が諸要素に分割可能であるからこそ、「チック」という印象を受ければ「タック」という音の印象が予測される、という因果分析・因果批判も成立するし、また逆に、差異的な「チック」「タック」それぞれの現れということにより、「チックタック」の唯一性も成立している。ヒュームの個別化原理は、以上のような段階を経て可能なものとなっている。

この個別化原理がそのまま人格の同一性における主体概念へ適用されるとき、知覚そのものが主体存在を表象し意味するとされ、「チックタック」と「チックバック」、「チック」と「タック」を知覚した知覚主体は、それぞれが知覚表象としては異なることが帰結される。ここまでは、ヒュームの主張と合致している。しかし、この知覚表象レベルでの問題を、メタ的な意味論レベルでの問題と混同すれば、主体は極小的なものとなり、時間的拮抗りを失っているものとなる。そうした場合、「チ」「ッ」「ク」「タ」「ッ」「ク」それぞれを聞いた主体はバラバラであり、意味の統一というものを行える主体はどこにも存在し得ないことになる。つまり、要素としての各言語記号がそのまま主体を意味した場合、言語記号の意味作用が行われるところの主体がそのレベルにおいてはどこにも存在しなくなり、最初の印象である「チックタック」そのものが印象としての意味を失ってしまう。これは、明らかにヒュームの意図とも、そして因果分析を成立させるところの彼の経験論とも異なるものといえよう。これは、最初の印象「チックタック」において、「チ」を最初に聞いた人格が、最後の「ク」を聞いた人格と同一である、ということではない。最後の「ク」を知覚し、「チックタック」を知覚した人は、必然的に最初の「チ」という知覚によっても構成されているということである。この在り方は、ヒュームの因果批判および人格の同一性批判のどちらにも適合する主体性の在り方といえよう。知覚表象レベルにおいては各知覚によって表される各主体はそれぞれ様相および在り方そのものが異なることは、ヒュームだけでなく我々も認めるところである。しかし、また、意味成立のレベルにおいて、時間的相違を超えた形で、記号的な各要素（知覚）から構成され、意味の統一を行

う「特権的」な主体が、必ずはその過程において一人以上存在することは認めなければならない。もちろん「特権的」とは、意味構成を行うところの読み手としての立場であるという意味である。そしてこれは、各言語記号がそのまま自らを各々同格的な主体として、主体自身の認識レベルにおいて表象できないことを意味する。認識のレベルにおいては、認識状態そのものが、各知覚によって構成された「特権的」主体の状態であり、そこにおける読み手は一人しか存在しない。もちろん、前・認識レベルにおいては、それとは全く異なる意味成立の可能性が存在するため、他者的主体性もまた否定はできない。「特権的」主体は、認識レベル外では、複数存在しうことは認めねばならないであろう。そもそも、言語記号の意味、そして言語記号そのものも、本来は受話者・発話者である主体とは個別的でなければならないはずである。主体に対し言語記号が独立的・非依存的に存在しているからこそ、意味の差異性・解釈可能性も存在しているのであるし、事実、知覚者としての受話者・発話者の実在性を超越した意味の枠組みというものが成立しているのである。ヒュームの因果分析においても、端的な事象や記号というものを越えた意味生成の場であるところの主体（および反省的印象）が存在することは前述したとおりである。

それゆえ、実際に「チックタック」の最初の「チ」を知覚しなかったとしても、「チックタック」の最後の「ク」を聞くことで「チックタック」の意味が主体としての聞き手に与えられることも、また、最初の「チ」しか実際には聞いていないのに、統一的に「チックタック」という聞こえる、もしくはそれを予覚するという現象が生じるのである。実際には「タック」しか知覚していないのに、「チックタック」と鳴ったのではないかという感覚、また「チック」しか知覚していないのにそれを「チックタック」の「チック」として認識するという感覚は、まさにヒュームの因果分析における観念連合の本質を示しており、この現象は明らかに「同じ主体が実際にそれを経験している（する）はず」というような主体実在論を前提とするものではない。つまり、知覚されない言語記号というものが、知覚される言語記号と意味作用において結びつくということこそ、ヒュームの因果分析の核心部分である以上、ヒュームの因果批判を有意義なものにしているのは非実在論的な主体概念であるし、それこそまさに人格の同一性批判において強調された主体概念である。そして、このことにより、因果批判成立の前提となっている主体概念と、人格の同一性批判における主体概念とは矛盾するものではなく、むしろ整合的であるとさえいえるであろう。ヒュームが実際に非実在論的な主体概念を用いて分析を展開したことこそ、因果分析そのものを有意義とさせている前提であることが論じられた今、懷疑主義的か否か、あるいは実在論的か観念論的か、というような二分法を越えたものとしてヒュームの主体概念が理解されるのではないだろうか。

「3」 結論

ここで最後に、ヒューム思想における主体概念が示していることについてまとめてゆきたい。因果批判から人格の同一性批判までにおける認識論全般に及んでいるヒュームの意図は、「実在」「魂」というような形而上学的概念の否定にあった。ゆえに、二元論的な「実在」「靈魂」の概念と結合した主体存在もヒュームは明確に否定しているし、それこそがまさにヒュームの思想を懷疑主義として一般的に解釈されがちにしているものでもある。

ヒュームの経験論的な議論が、そもそも主体実在論を前提としておらず、むしろ意味論的なものとしての在り方をしており、因果批判において前提とされている主体概念と、人格の同一性批判における「知覚の集合としての主体」とは決して矛盾するものではないことは前述したとおりであるが、それならば、そもそもヒュームが描く主体像というものはどのようなものであるのだろうか。

主体の同一性批判を可能とするようなメタ自己意識の立場において、過去におけるT1での知覚と、現在におけるT2での知覚との個別化を図ることは、現時点における観念連合を吟味・批判しているわけであり、これは因果分析と同じ手法である。つまりこれは、観念と観念との間にはいかなる結合もないということを理解し主張できる立場である。というのもそれは、T1での観念と、T2での観念とが独立的に存在していることを認識し、感じとれるからである。この立場をメタ自己意識的な立場であるとしよう。

しかし、メタ自己意識の立場ではなく、実際のその観念を自身の記憶言明として所有するT2での主体にとっては、T1での観念（記憶）がT2での自身と独立的に存在していることは感じ得ない。なぜなら、ヒュームが主張するように、T2での自己は知覚の集合体であり、それはT1での観念（記憶言明）と不可避的に結合しているからである。

ここで再び注意が必要になる。T2における自己は、T1における知覚から構成されていることは理解できるにしても、T1における知覚が示すところの主体人格に構成されているわけではない。ある人物Aがさまざまな記憶や観念によって構成されていることは理解できるが、そのAが、そのようなさまざまな記憶や観念の原型である印象を経験した主体B（他人格）によって構成されているということにはならない。それがAにとって実際には経験していない擬似記憶であろうがなかろうが、私という主体が他の主体に対し分離・独立的に存在しようというのであるならば、なおさら、私を構成する知覚というものが他者存在を直接的に示すという論理には矛盾が存在している。ゆえに、「私」は知覚の集合体であるとする見方は、ヒュームが知覚＝主体存在という立場に立っていたのではなく、知覚＝非人称的構成要素、という立場に立っていたことを意味している。そこでの主体は決して時間的極小点に閉じ込められたものではなく、そこには記憶（観念）あるいは予覚を有することによって拮がってゆく主体を表しているのである。不可避的に反復の様相を伴いつつ構成されてゆくヒュームの主体というものは、同一的・不変的な二元論的主体ではなく、厳密な意味から逸脱した形でのみ反復されてゆく、拮がりの可能性を有し、それがゆえに不完全な存在者としての主体なのである。

さらに付け加えるならば、人格同一性の概念を成立させている反省的印象、それによって示されているヒュームの主体性は、明らかに「思考」よりも「感覚」に重点を置いている。ヒュームにおける主体性とは、「自身について思考する」とか、「過去について思考する」というような、思考能力に基づいているのではなく、過去に於いて経験したとされること（経験の感覚）を思考している自身を「感じること」に基づいている。すでに思考してしまっている自身を感じることは、これこそがヒューム哲学における主体性が成立する要件なのである。よって、思考者・判断者としての人格は、そこを起点として世界が開示されてゆくような原初的存在ではなく、むしろ世界が自身を超えた形で既の開示されているような、一種の構築物であるということがヒュームの主体論において示されているのではないだろうか。それゆえ、ヒューム思想における主体性を成立させるのは、自身を振り返るような思考者としての思考能力ではなく、自身を感じ取れるような感覚能力ということであり、そうしたヒュームの立場は、主知主義的で

厳格な理性主義よりも、生の感覚に根ざしたより日常的な人間像に近いものである。ヒュームの認識論は、通常、彼の情念論と比較した場合には懐疑主義的あるいは非日常的なものとして解釈されがちであるが、以上の点を考慮すれば、ヒュームの認識論はそうであるどころか、生身で実際の人間に近いような主体像を暗示するような、生の哲学ともいえる面を有しているのではないだろうか。

(なかむら・たかふみ 社会文化科学研究科博士課程)

註

- (1) 以下より、David.Hume『A Treatise of Human Nature』Second Edition by P.H.Nidditch Oxford University Press (1984) の略記としてTを使用する。
- (2) David Pears『Hume's System』Oxford University Press (1990)P121～123
- (3) G. ドゥルーズ著／木田元・財津理訳『経験論と主体性 ヒュームにおける人間的自然についての試論』河出書房新社 (2000)P20～21
- (4) *ibid* P14

参考文献一覧

- 神野慧一郎著 (1984)『ヒューム研究』ミネルバ書房
- G・ドゥルーズ著、木田元・財津理訳 (2000)『経験論と主体性 ―ヒュームにおける人間的自然についての試論―』河出書房新社
- G・ドゥルーズ著、財津理訳 (1992)『差異と反復』河出書房新社
- 杖下隆英著 (1982)『ヒューム』勁草書房
- デビッド・ヒューム著、木曾好能訳 (1995)『人間本性論第一巻 知性について』法政大学出版局
- Hume.David (1984)『A Treatise of Human Nature』Second Edition by P.H.Nidditch Oxford University Press
- Pears.David (1984)『Hume's System』Oxford University Press